ゲームセットの笛が鳴り響く。最後の試合が終わった。予想どおり深堀中学の惨敗だった。

中学3年の秋。受験シーズンの到来に備えて、3年生は部活をやめ、学業に専念する時期が来ていた。

「磯谷先輩、お疲れさまでした」

はるかに背の高いの後輩たちが声をかけてきた。

有希はとうとう最後までバレーボール部を続けたのだった。

厳しかった先輩たちも、卒業するときにほめてくれた。

「よくがんばったよ、磯谷」

「あんた、バレーうまくなったじゃん」

「バレーがうまくなった」——有希にはその言葉がいちばんうれしかった。そして、「磯谷」と呼び捨てにされたことも。

だが、その言葉は嘘だった。

強豪チームを支えてきた先輩たちが卒業してからというもの、深堀中学女子バレーボール部はたちまち評判をおとしていった。それまであまりに先輩たちに頼ってきたせいでチーム作りというものをまったくしていなかったのにくわえて、有希の代は部員が3人しか残っていなかった。先輩たちを育てるのもままならず、全道大会でも常に上位に入っていたチームは、瞬く間に“へなちょこチーム”と化していたのだった。しかも有希はセッター対角のレシーバーで試合に出してもらえないことさえあった。

とはいえ、とにかく2年半やり終えた。

それは、有希にとって大きな自信となっていた。

その日は赤飯だった。

「よく続けたな、有希」

はじめて最後までやり通した娘を、猛は心からほめた。

「あたりまえだよ、そんなの」

そう言いながらも、有希は満足感に浸っていた。

ところが、亮子のひと言でいきなり現実に引き戻された。

「部活も終わって、今度はいよいよ受験ね」

「そういやそうだね。ぼちぼちやるか」

「ずいぶんのん気だけど、少しは考えてるの?」

「いや、全然」

「由佳里はこの時期にはもう態勢整えてたわよ。あんたもしっかりやってくれなくちゃ」

母のその言葉には、言外に父親が教師なのにヘンな学校に入られては世間体が悪いという気持ちがにじみだしていた。そしらぬ顔でつぶやいた。

「教師を親に持つって、ラクじゃないやねぇ……」

「そのとおり!　わかってるなら、よけいにちゃんとやれ」

今度は父からたたみかけられてしまった。

「あ~あ、一難去ってまた一難か」

ベッドの上でごろりと寝ころがって、有希は大きくため息をついた。

さっき、「少しは考えてるの?」と聞かれて、「全然」と答えたが、実はとっくの昔に志望校は提出していた。その高校は有希の学力からすると、やや無理があるのは承知していた。しかし、橘くんと同じところに行きたいばっかりに、少々の猛勉強は仕方あるまいと腹をくくったのである。

「磯谷、お前の志望校だと、これからかなりがんばらないと難しいぞ。覚悟してるんだろうな?」

担任にも念を押された。

「はい。部活が終わったら、気合入れてがんばります。私、短期集中型ですから」

そうきっぱり答えたまではよかった。

だが……

思いもかけない展開が待っていた。

「俺さ、志望校、変えたんだ」

彼は有希の気も知らず、ひとりで志望校を変えていたのである。

「どうして?　私、橘くんが前に言ってた志望校書いて提出しちゃったよ」

「ごめん。俺の親友いるじゃん、アイツがさ、そっちの高校に行くって言うから、だったら俺もそうしようと思って。磯谷も今から変えられる?」

それは無理だった。もう願書は提出してしまったのだ。

「私より親友のほうがいいの?」

と詰め寄りたいところを我慢して、

「もう遅いよ」

とぷいとふくれるのが精いっぱい抵抗だった。

いったい何を考えているのか、有希には彼の気持ちがわからなかった。有希は何より彼が一番で、彼のことばかり考えていた。でも彼は、男友達やバレーボールや勉強や遊び、いろいろなものがいっぱいあって、そのうちのひとつに有希がいるという感じだった。とくにここ最近、彼の有希への態度は前よりそっけなくなっていた。

「3年近くつき合ってれば、そんなの普通だよ」

友達には軽くいなされた。

「まぁ、いっか」

学校が違うからといって、それで仲が壊れるわけではない。有希は自分にそう言い聞かせた。

桜、散る。

合格発表のその日志望校だった高校の掲示板に有希は自分の受験番号を見つけることができなかった。彼と離ればなれになるのがわかって以来、たいした勉強もしなかったから、当然といえば当然の結果だった。

「落ちたよ」

家に帰って言うと、祖母が泣いた。

すべり止めの高校は女子校で、そちらは先に受かっていたが、それもどうでもよかった。今の有希の心を占めているのは、橘くんとバラバラになる、それだけだった。

有希の不安は予想以上に早く現実のものとなった。

卒業して間もなく、春休みある日に電話で突然の別れを切り出されたのである。

「俺、実は好きな子ができたんだ」

有希は言葉を失った。頭が真っ白になって、何も考えられなかった。何も感じられなかった。

有希の沈黙が耐えられないのか、彼は追い打ちをかけるように言葉を足した。

「説明会に行って、そこでひと目惚れしちゃったんだ」

「なんで、そういうことになっちゃうの?」

「ごめん」

あやまりの言葉も、有希の耳にははるか遠くからの雑音にしか聞こえなかった。

卒業式の後、ふたりきりで教室でお祝いをしたのは、ほんの1週間のことだった。

照れて何も言えなかった。あの海辺での時間のように。消されたストーブの横で、小さな机をはさんで、縮こまりながら座っていた。窓ガラスを叩く雪と風の音だけが、ふたりを包んでいた。

「卒業、おめでとう」

「おめでとう」

「……」

「……」

見回りの先生に叱られるまで、ふたりはずっと机をはさんだまま、言葉もなく向かい合っていた。

「とにかく電話じゃうまく言えないから。　じゃあ」

かちんと電話を切られた。

有希は受話器を置いて、それからふらふら海辺に出た。

砂浜に腰を下ろすと、水色の影が遠くを流れて、深い海の底に誘われるような気がした。折れ曲がる光がゆらゆらと重なって、たよりなく揺れている。

(どうして人はずっと同じ気持ちでいられないのだろう)

ふたりで過ごした海辺はひんやりと冷たかった。優しかった波も今は有希を拒絶しているように思えた。

(このまま、この海の中で眠ったら、終わりを見ずにすむかもしれない……)

そのとき、妙な音がして、有希はふっと我に返った。

こんなときですら、お腹が鳴ってしまう自分の体をうらめしく思いながら、有希は明かりのついたわが家にぼとぼと歩きだした。